

2015年度教師海外研修(エルサル) 研修報告書

学校名	愛知県立瑞陵高等学校	氏名	田中 真弘
-----	------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

どうしたら開発途上の国がより豊かになるだろう。どうしたら資源がない国が、資源がある国と国際的に渡り合えるのだろう。などと現地研修に行く前は考えていた。ほんの2週間であるが、現地を知ることができた。今では目的の達成度としては“End of the Beginning”「はじまりのおわり」というところであろう。まだまだエルサルバドルのことを把握したとは言えないが、ほんの少しだけエルサルバドルのことを深く考えることができた2週間であった。とりわけ産業という観点で豊かになるすべを探る目的は、コーヒー農園の実態について知ることができたことが大きい。4年前からロアカビが発生していて数万人の人達が失業したこと、ロアカビに耐性があるコーヒー豆は味が良くなく、味が良いものはロアカビに弱く、どういう風に掛け合わせれば商品として成り立つのかを研究していることは興味深かった。地道に研究を重ねて研究結果に数年もかかり、目に見える成果にたどり着くまでには相当の辛抱が必要なことも開発教育に似ていると感じた。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

長いようで短かったエルサルバドルでの2週間の滞在で肯定的に感じたことは多かった。内戦時代の爪痕が残り、武装集団マラスが政府と対立して治安が悪く、なかなか国内経済が落ち着くには時間がかかりそうだ。そんな中でも、教育に力を入れ、農協の改革を進め、コーヒーの品種改良で生きていくすべを探る草の根的な努力も垣間見られた。そこには、一人一人の人が天候や環境に振り回されながらも何とか生きていくという力があった。JICAによる国際技術協力や草の根的なボランティアの活動や地元の人との交流など、この国では協力なくして発展は語れなく、それらの恩恵を素直に受け止め、共に成長していこうという姿勢が随所に見られた。問題を抱えながらも一番大切にしたいと感じたのは、人のための人による協力する気持ちと行動だと強く感じた。エルサルバドルを肯定的に感じるのは、そこに生きる人の生き方であり、天災であれ人災であれ、どんなに環境が悪かろうが前向きに生きる姿だ。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

エルサルバドルは「中米の日本」と言われていて、人は温かく勤勉でまじめな性格である。おっとりしてその日暮らしを楽しむ様子は、どことなく一昔前の日本を思い浮かべせる。自然豊かな山々も日本の風景に似ていることもあり親しみを覚える。つながりに関しては、日本のODAによる技術やインフラの整備、JICAや技術ボランティアによる地域開発のための協力、その他草の根活動によるボランティアなど、一見様々な分野でつながっていそうだが、エルサルバドル在住の日本人はほんの150人程度で、まだまだ日本からは遠くで知られていない国だと言わざるを得ない。エルサルバドル人も日本人を見ても、中国人だと思っているらしく、もっと言えば、アジアの国は皆同じという感覚があるらしい。私達もエルサルバドルが隣のニカラグアやホンジュラスとどう違うのかわからないことが多いことと同じなので、日常のお互いにもっと知り合う機会が増えれば良いと感じた。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

開発途上の国がいかに発展していけるのか、資源がない国がいかに国際競争に打って出るのか、武装勢力が政府に圧力をかける国がいかに住みやすい国になるのか、これらの課題は日本が戦後経験した国の復興に似たものがある。日本は戦後疲弊した経済を立て直すために国民が一同となり経済回復に努めた経験がある。この経験を何とかエルサルバドルの発展に役に立てられないだろうか。日本人がインフラ整備、農業経営の方法、観光業のあり方、看護の考え方、教育の方法など、ボランティアの方々が知恵を授ける一方、エルサルバドル人がこれを学び、自らの手で発展していけるようになっていく。そして、日本人もこの国際協力の経験を日本での活力とし、エルサルバドル人の良い気質から、日本での不登校や過剰労働といった問題に対処していく。そういった相互での助け合いや学び合いについて、もっと多くの人に開発教育を通して考えてもらえれば、よりよい世界になっていくだろう。共に考え、共に問題を乗り越える意識が大切であることを再認識した。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「良い!と思ったところ」

JICAのボランティアや国際協力事業は、日本の技術をエルサルバドル人に浸透しやすく伝えている点で良いと感じた。例えば、グアダラルペ・カルカモカトリック学校で行われていたように、防災教育ではカエルキャラバンなど、カエルのぬいぐるみで実際に救助や搬送を子どもたちが体験していた。こちらの意図が現地の人にうまく伝えることが大事で、子どもたちが楽しく取り組めるアクティビティーはとても良かった。また、中米大学での耐震教育では日本の最新の技術ではなく、古典的な竹を用いての基盤作りなど、コストをかけずに実際に役に立つ知恵を与えている点で良いと感じた。これらのことは、なかなか日本にいる人達には知られていないことなので、広報や教育活動を通じて日本にもっと広めるべきであろう。

「今後あるといいなと思う視点」

生徒参加型が主流であったが、町ぐるみで先生や地元の人も参加できるアクティビティーがあればいいと感じた。グアダラルペ・カルカモカトリック学校の防災訓練では、市役所の人達がたくさん協力してアクティビティーを行っていた。治安の問題もあるが、これに加えて地元の人が気軽に参加できればよりよい成果が上がるのではないかと思った。

また、現地での教師海外研修がこの2週間で終わらずに、フォローアップとして何らかの貢献ができれば良いと感じた。例えば、10年後に有志を募ってもう一度現地を訪問してみるとか、現地の人による教師海外研修を企画して日本を知ってもらうとか、何かつながりがあれば良い。

5. 印象に残る写真2点とその解説

●写真1… [MRK_0591]

◇キャプション：エルサルバドルコーヒー研究所 (PROCAFE) での研究風景

◇解説文：「ロアカビに耐性のあるコーヒーの苗」と「味の良いコーヒーの苗」を掛け合わせて商品化につなげる研究を進めている。これらの内の一つがこれからエルサルバドルの産業を支え、市民の生活を豊かにするキーとなる。



●写真2… [MRK_0630]

◇キャプション：通訳者 橋本みどりさん

◇解説文：自慢の通訳「みどり」さん。通訳の能力のすばらしさに加えて、持ち前の個性豊かなキャラクターでいつも場を和ませてくれた。彼女の影響で多くの参加者がスペイン語の大切さを知った。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

エルサルバドル研修に参加される先生方は事前に簡単なスペイン語を勉強しておくが良い。訪問先で子どもたちと活動するときや、何気ない質問をするときでもスペイン語でフレーズを覚えていたら便利だし、重い空気が和らぐ。ホテルやレストランでのサービスも良くなる。

もしものための非常食が役に立った。毎日現地の慣れない塩辛い料理で胃に負担がかかるので、カロリーメイトや即席麺などが役に立った。多めに持って行って、余った分はJICA事務所に寄付した。残り物でもとても喜んでくれた。

早朝出発で移動は長く、交通渋滞もあり、帰りは2、3時間遅れで解散なんてことが毎日のように続くので、なんとか夜の睡眠時間は確保したい。

7. その他全般を通じての感想・意見など

今回の研修を通じて、よりいっそう開発教育・国際理解教育への関心が高まった。日本において、どうしたらエルサルバドルの人達が豊かな生活を営めるようになるのかを考えていたのが、現地を訪問して変えることの難しさを目の当たりにした。根本的な改革はさておき、今そこにある資源や人や物で変えられることは、現地の人の意識によるものが多い。我々日本人は知恵や工夫を提供して、実際には現地の人達がそれを引き継ぎ変えていくような生活にできるのが理想である。JICAボランティアの方々は何の見返りもなく命を削って尽力している。その姿を見てエルサルバドルの人達が変りつつあるということは今回の研修で知ることができた。日本とエルサルバドルとの関係がよりよい方向に向かうよう、若い人材を育てることが我々教師にできるささやかな国際協力であると感じた。